鳳凰未だ堕ちず

ロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳳凰未だ堕ちず

【Ｎコード】
Ｎ７７９５Ｚ

【作者名】
ロック

【あらすじ】
――偉大なる海の船乗り達（グランドライン）の間で、こんな話がある。
この海には、決して敵に回してはいけない男が居る。
黄金に輝くそれを見たら、戦おう等という馬鹿げた事は考えてはいけない。
あれは――化物だ。
ってけーねが言ってた。

＝＝＝

はい、どうも初めまして。

ロックと申します。

処女作にございますので見苦しい作品になるかとは思いますが、どうぞお付き合い下さいませ。

プロローグ？（前書き）

はい、どうも初めまして。
激しい目眩と吐き気に襲われ、熱を測ってみたら３２度という低体温だったロックという者です。
処女作にございますので見苦しい作品になるかとは思いますが、どうぞお付き合い下さいませ。

プロローグ？

偉大なる海（グランドライン）……。

そこは、数多の者達が力を、富を、名声を、そして夢を追い求め集う、険しい海。

数多の者達の野望が、欲望が、希望が、そして絶望が渦巻く魔性の海。

波風一つ無い穏やかな海が、次の瞬間には大嵐に襲われて荒れ果てている、何て事は日常茶飯事であり、『非常識こそが常識』を地でいく、そんな海だ。

だからこそ、人々はそこに夢を見、だからこそ、人々はそこに惹かれていく。

数々の苦難と試練、立ちはだかる不自然な自然の脅威、数多の宿敵との戦い、それら全てを乗り越え、偉大なる海の果て（グランドライン）を見た者に……、偉大なる海（グランドライン）を走破した者だけに与えられる称号……、人はそれを、海賊王と呼ぶ。

――鳳凰未だ堕ちず――

海に浮かぶ、一つの船があった。

大型に分類されるであろうその船は、一言で表すならば、黒。

船体からマスト、そしてマストに掲げられた旗までもが黒で覆われたその船は、初めて見た者に威圧感を与えるだろう。

だが、どこまでも黒で統一されているからこそ、それは良く映えるのだろう。

――白い、ドクロの海賊旗は。

その海賊の名は、ロッド。

『豪腕』のロッドと言えば、この近海で強く恐れられている、文字通り豪腕で名を馳せた海賊だ。
その豪腕は船を真っ二つにするだの、敵船のマストをへし折って振り回していただの、とにかく彼を表す噂は多い。
そんなロッドの首に懸けられた賞金は、４０００万ベリー。
十二分な悪党である。
そんなロッド率いるロッド海賊団は、先日襲った商船から奪った戦利品を確かめていた。

「ヒュゥ！　こんだけありゃ、暫くは遊んで暮らせるぜ！」
「くぅぅ！　次の上陸が楽しみだぜぇ！　飯に酒に女！」
「流石は我等が船長だ！　よっ！　この大悪党！」
「ちげぇねぇ！」
「当たり前だろう。俺にかかればあんな商船五秒で廃船だ。……言わせんな馬鹿、恥ずかしい」

ギャハハハと、品の無い笑い声を上げて、船員達はロッドを持ち上げる。
言われる本人も、満更では無さそうな顔で自慢の顎髭を撫でた。
商船を、街を襲い、金品を奪い、皆で山分けする。
そう、それで終われば……、終わっていたのならば、何時もの襲撃後に見られる光景であったのだ。
だが、偉大なる海（グランドライン）は、彼等に牙を剥いた。

「船長ォ！　９時の方角から変なのが来やすぜ！」
「馬鹿野郎！　誰から見て９時の方角か言わねぇか！　……言わせんな馬鹿、恥ずかしい」

内心で変なの？　と首を傾げながら、ロッドは船員が指差す方角を見、そして口をあんぐりと開けた。

「なんだありゃ……」

思わず口から出た言葉は、船に乗る全ての人の気持ちを代弁していた。

それは、黄金に輝く『何か』だった。

短くは無い時間を海で過ごしてきたロッドをしても未だかつて見たことの無いその『何か』は、ともすれば神々しいと言っても過言では無い様にすら思えた。

もしもここにそれを知る者が居たならば、目が飛び出さんばかりに驚いただろう。

――それは、神々しい迄に黄金に輝く、ピラミッドだったのだから。

「何だか知らねぇが、このロッド様に見つかったのは運が無かったな！　野郎共、戦闘準備だ！」

「おぉぉ！」

呆けていた頭を軽く振って正気に戻したロッドは、その顔に獰猛な猛禽類の様な笑みを浮かべ、船員達に号令を下した。

それに二つ返事で答え、素早く装備を整える辺り、この海賊達の錬度の高さが伺える。

そう、このロッド率いるロッド海賊団は決して弱くは無い。

海軍の強烈な攻撃を凌ぎ略奪行為を続けて来たのも、４０００万という賞金が懸けられた首も、決して伊達では無い。

――相手が悪かった、ただそれだけの話だ。

「おっと、ここは通さねぇぜ！　通して欲しけりゃ、それなりの物置いてきな！」

「まぁ、全部貰うんだがな！」

「ちげぇねぇ！」

訳の分からない黄金に輝く『何か』に、ロッドは大声でそう啖呵をきった。

それに続き、部下達も下品な笑い声を上げながら口々に言う。

そう、そこまでは何時も通りだったのだ。

――その男が、姿を現す迄は。

「ほぅ……？　自らこの俺に挑む者がまだ居ようとは……」

ゆっくりと上段から姿を見せたのは、一人の男だった。

金色の髪を短く揃えた、整った顔立ちをした男だ。

鷹の様に鋭い目付きに、一目で判る程に鍛えぬかれた一切の無駄の無い筋肉、そしてその身体から発せられる目眩を覚える程の威圧感。

構えも取らず、無手のままこちらに近付いてくる。

そんな、一見隙だらけな男から、ロッドは目を離せなかった。

目を離せば死ぬと、これまで幾度もロッドの命を救ってきた勘が、警報をガンガンと鳴らしていた。

「フフフ……。どうした？　まさか今更臆したとは言うまい……。さぁ、かかって来るが良い！」

馬鹿を言うなと、ロッドは声を大にして叫びたかった。

鴨が葱を背負って来たかと思えば、実は鴨葱は自分であった、そんな絶望感に、ロッドは襲われていた。

「テメェ……。一体何者だ……」

何とか絞り出した、掠れた声でそう問う。

ロッドの必死なその問いに、男は口角を吊り上げた。

「俺か？　良かろう、今日の俺は気分が良い。特別に死に逝く貴様に教えてやろう……」

男は、心底愉しげにロッドを嘲笑った《わらった》。

「俺は聖帝サウザー！　南斗六聖の帝王！」

その日、ロッド海賊団は壊滅した。

――偉大なる海（グランドライン）には、決して敵に回してはいけない男が居る。

黄金に輝くそれを見たら、戦おう等という馬鹿げた事は考えてはいけない。

あれは――化物だ。

プロローグ！（前書き）

どうも。風呂から上がった瞬間にぶっ倒れて妹に悲鳴をあげられたロックです。

これにてプロローグは終了です。

7件もお気に入り登録して頂いて、ありがとうございます。
まだまだ未熟な身ではありますが、登録して頂いた皆様の期待に応えられる様に努力致します。

プロローグ！

――ジョインジョインジョイン。

「さて、君は誰にしようかな？」

突然頭の中に、何処かで聞いたことのある音と、若い男の声が響いた。

――ジョインジョイン。

「うぅん……。病人は楽しく無いし、海苔眉も何だかしっくり来ないしなぁ……」

鳴り続き、響き続ける音と声が気持ち悪い。

鳴り続ける音が、聞き憶えのある音だというのもそれを助長しているのだろう。

誰しも、咽に小骨が刺さっていたら気持ち悪いものだ。

――ジョインジョイン……ジョイン。

「悩むなぁ……。ねぇ、君は魔法使いかい？　マダンテが使えるなら悩まずに石油王なんだけどねぇ」

魔法使い？　石油王？　病人だの、海苔眉だのと、訳の分からない事ばかり言っている声に、さっきとは違う意味で眉を潜めた。

……ん？　何だろう、そんな訳の分からない筈の言葉群にも聞き憶えが……。

――ジョインジョインジョイン。

「ありゃ、返事が無いな……。ってそりゃそうか。うん、やっぱり君は気にしなくても良いよ。悪かったね」

いやいや、お構い無く……、じゃなくてだな。

――ジョインジョインジョインジョインジョイン。

「うん、困った時はやっぱりこれだね！　何　れ　に　し　よ　う　か　なっと！」

いきなり適当になった。コイツは一体何がしたいんだ。

――ジョインサウザァ。

「うん、決まりだ！　君は今日から聖帝様だ！」

そうだ、思い出したぞ。これ、あの北斗の――。

「ふふ。さて君はどれだけ僕を楽しませてくれるかな？」

そんな楽しげな声を最後に、俺の意識は浮上していき――

「北斗！　有情猛翔破！」

「はっ？」

――目が覚めたら、死にました。

――鳳凰未だ堕ちず――

「ヒィ、ヒィ、あぁ……。ありがとう、まさかあんなに笑わせて貰えるとは思わなかったよ」

「……そりゃ良かったですね」

不貞腐れた態度になるのも仕方無い話だ。少なくとも、俺はそう思う。

「いやいや、本当に悪いなとは思ってるんだよ？　こっちがミスした訳だしね。……でも、アレは逆に笑わない方が難しいよ」

小さく肩を震わせ、再び笑い出す自称神様な目の前の若い男。

本当に悪いと思っているのだろうかと、疑わない方がおかしい態度だ。

――俺は、どうやらこの自称神様に勝手に違う世界に跳ばされそうになっていたらしい。理由は知らんが、この様子だと大した理由も無さそうだ。

だが、普通に送り出しては面白く無いと考え、思い付いたのがさっきのジョインジョイン音。

北斗の拳の格闘ゲームだ。アレで選ばれたキャラクターの力を持たせて行かせようとした（聞けば、俺以外にも何人かこの方法で跳ばしているらしい）が、そこでこの自称神様は『うっかり』ミスを犯した。　それが、今俺がここに居る原因であり、目の前の自称神様が爆笑している原因でもある。

何をトチ狂ったのか、俺の精神――魂とも言えるか――を海苔眉に殴り飛ばされる寸前の聖帝様に入れたのだ。

想像して欲しい。目を覚ました瞬間に、目の前に拳が向かって来ているのを。

当然、避けられる筈もなく、俺は海苔眉によって殴り飛ばされ、死亡した。
唯一助かった点は、有情拳であったが為に苦しまずに逝けた事くらいか。
そして、それを見ていたこの自称神様もこれはイカンと俺の精神を拾い上げ、此処に連れてきて今に至る、という訳だ。
俺の抜けた聖帝様は今頃「お師さん……。もう一度温もりを……」とでも言っているのかも知れない。

「いやぁ。君にはとても感謝しているし、悪いと思っているよ。何せ、こんなに笑ったのは久々でね、今はとても良い気分だよ！」
「そうですか……」

だろうな。その腹が立つ程の満面の笑みを見れば、誰でも分かる。

「そこで、だ！　君にはこれから行く世界を選ぶ権利と、何か一つ願い事を叶える権利をあげるよ！」
「行く世界ってのは、元の世界には……」
「うん。君の考えている通り、それは出来ないよ。君は今、ここに精神――魂と言った方が分かりやすいね――だけで居るだろう？　ということは、君の身体は今魂が抜けた状態で居る訳だ。身体から魂を抜くって事は、つまり――」
「俺の身体は死んでいる……」
「――その通り。身体から魂が抜けても、それが短時間なら良いんだ。幽体離脱、なんて言葉をたまに聞くだろう？　魂が抜けて、その魂が身体に戻れなくなる条件は『その身体が生きているか、死んでいるか』これに限るね。そして、君の身体は既に死んでいる。故に君は元の世界に、もっと言うならば、君は、君の身体に戻ることは出来ない」
「そうですか……」

そうではないか、とは思っていたが、やはりショックなものはショックだ。

「理解して貰えたかな？　では次の話へと進もうか。さっきも言った通り、君には違う世界に行って貰う訳だけど、その世界を決める権利と願い事を叶える権利があると言ったね？　それを決めて欲しい訳さ」

「あの、それがよく分からないんですけど……。願い事を叶える権利ってのは何となく分かりますが、世界の決定権と言うのは？」

「うん、言葉の通りさ。君がこれから過ごす為の世界を決める権利だよ。魔法がある世界、ドラゴンとかのモンスターが生息する世界、言い出したらきりがないね。これを自由に選択出来る権利さ」

なるほど。しかし、これは困った話だ。好きに世界を選べと言われてもな……。

「俺の力っていうのは、あの聖帝様の力で固定ですか？」

「そうだね……。うん、その通りだよ！」

おい、どうして一瞬考えた。まぁそれは置いといて……、聖帝様の力っていうのは十中八九南斗聖拳で決まりだろう。その中でも最強とされる南斗鳳凰拳、確かにこれは非常に強力だ。

あの力を活かせて、且つ生き残れそうな世界となると……。

「良し、決まりました」

「了解、じゃあ聞こうか」

俺が行く世界……。それは――

「ワンピース、この世界でお願いします」
「ほう……？」

――ワンピースだ。この世界を選んだのにもちゃんと理由はある。
先ず、悪魔の実なんて非常識的な物が存在しているが、その絶対数はそこまで多い物では無いだろう、という推測からだ。確かにストーリー進行上でスポットライトが当てられたキャラクターは、その大半が能力者だったが、あの世界のあの時代には、海賊達が星の数ほどにうじゃうじゃと居るんだ。その中で、と考えれば、やはり能力者の絶対数は少ない。
つまり、しっかりと相手を見極めれば、戦闘時においても危険は少ないだろうという事。
次に、六式等、無手での戦闘が多い事。南斗聖拳も、十二分に通用するだろう。それに聖帝様って、身体能力だけで六式極めてる様な物だし。
そして、あの世界は非常に自由度が高いのだ。海軍に入るも良し、海賊になって気儘に動くも良し、ルフィ達麦わら海賊団に入るも良しと、選択肢が多岐に渡る。
まぁ、これは何処に行こうが同じだろうが……。

「ワンピース、ね。了解了解、了解したよ。さて、次は願い事だけど、何かあるかい？」
「はい、もう決まってあります」

これはこの話を聞いた時から決まっていた。

「俺の家族が、今後幸せに生きられる様にして下さい」
「……」

親不孝しかしてこなかった俺だ。最期くらい、親孝行しても良い

だろう？　婚期を逃した姉も非常に心配だしな。

「わかった。任せてくれ」

「……任せました」

これで、未練は無い。

「それじゃあ、送るよ？」

「お願いします」

人生２０年。あまり長生きは出来なかったけど、それでも楽しかったと胸を張れる。

あぁ、本当に――

「――良い人生だった」

その日、俺は世界から消えた。

――――

「良い人生だった……か」

そう呟いて旅立った青年。

「こんな目に逢わせられて、良く言うよ」

思わず苦笑が出た。願いを言え、と言われて、家族に幸せをと願った青年。

「良いね……。楽しくなってきたよ……」

こんなにも僕を楽しませてくれたのは、君が始めてだよ。

「ふふ、さぁ君はどれだけ僕を楽しませてくれるかな？」

プロローグ！（後書き）

うん、そうなんだ。
このジョインジョインサウザァがやりたかっただけなんだ。

第一翔：面白い、ならば数えてやろう！（前書き）

どうも、遅くなって申し訳ありません。
最近、人が足りないからと朝は６時から１４時までマクド〇ルド、一時間休憩の後に１６時から２４時（残業であがる時間はバラバラ）までパチ屋で、というシフトでバイトしてました。
はい、言い訳です。眠い……。
腰が死にました。

P．S
お気に入り登録が１３件に増えました。約二倍です。ホントにありがとうございます。
評価して下さった方がいらっしゃいました。ありがとうございます。お礼に梅干しを１つプレゼントします。

第一翔：面白い、ならば数えてやろう！

グランドラインにある、とある島のとある街の中にある酒場。
日々、たまたまその島に上陸した海賊や、その日の仕事を終えたお疲れなお父さん、笑顔が可愛いと噂のあの子に突撃隣の晩御飯で見事に撃沈したお兄さん（勇者）などが訪れる、様々な出逢いの場。
海賊も市民も、一切の身分や立場の関係無く楽しめる、皆の憩いの場である。
ところで、海賊がこの様な島に上陸する場合、『物資の補給』という暴虐が起こるのがこの世の常であり、故に海の賊と書いて海賊なのだ。
中には街に一切の手を出さない海賊も居るには居るが、所詮それは極少数の希少種、世にも珍しい存在であり、道を歩けば「キャァァ！　こっち向いてぇ！」と叫ばれるリア充に過ぎない。
海賊は犯し、殺し、そして奪うのだ。金を、尊厳を、女を、人権を、自由を、命を、全てを奪い去り、後には何も残らない。
餓えた蝗が如き存在、それが海賊なのである。
話を戻すが、そんな餓鬼が市民と酒場で談笑しているのだ。
この街を知らない人間がこの光景を見れば、恐らくは口を大きく開けて驚くだろう、そんな光景だ。
当然、この違和感しか無い光景には理由がある。
それは――

――――鳳凰未だ堕ちず――――

「今日も駄目だったよ……」
「全く……。お前も良く飽きねぇな。これで何度目だ？」

カウンターに突伏し、落ち込んだ声でそう呟いた少年に、グラスを拭きながらマスターがため息を吐いて呆れた様な視線を向ける。
毎回毎回ご苦労なこったな、と肩を竦めてからマスターはグラス拭きに戻った。

「うぅ、マスタァ……」
「はいはい、今度は何だよ……。ったく」

目に涙を溜めて見上げてくる少年に、気だるそうにしながらも、マスターは相手をする。
泣き上戸にして絡み上戸、酔えば泣いて絡んでくるのは経験上わかりきっているし、それを放置したらしたで手足をバタバタさせて泣きわめくのもわかっている。ならば、適当に相手をしてやった方が楽なのである。

「これでもう１００回目だぜ？　飲まないとやってられないよ……。あの子は何時になったら振り向いてくれるんだ……」
「１００回って、お前も大概馬鹿な野郎だよな」
「なっ！　馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ！」

予想外な回数に、マスターは思わず呆れた声を出した。
この街にある飯屋の看板娘のサラちゃん（１６歳）にぞっこんラブなこの少年は、島による度に飯屋に赴いては告白し、そしてフラれている（伝家の宝刀、お友達から始めましょう）のだ。因みに、好きになった理由は一目惚れだ。
最早、呆れを通り越して感心してしまいそうになる回数だ。
だが少年はそんなマスターの対応が気にくわなかったらしい。放置していた訳でも無いのに手足をバタバタさせて文句を言っている。
うがぁ！　と吠える姿は、正に子どもだ。

「こらっ！　カウンターで暴れるなと何度言わせるんだ！　ったく……、ガキかテメェは」
「まだピチピチの１６歳ですぅ。マスターみたいなオッサンからみたらガキですぅ」
「テメッこのガキが！　俺はまだ３９だ！」

ふてぶてしい態度の少年の頭に、マスターは拳骨を落とした。
痛い痛いと喚く少年とうるさいと怒鳴るマスターの姿は、最早この酒場の名物である。
何時もの光景に、酒場に居た客達は笑い声を上げた。

「おいおいマスター。あんまり叩くと馬鹿になるぞ」
「あん？　どうやったらこれ以上コイツが馬鹿になるってんだ」

違いない、と笑う客達に、マスターもふっと笑った、そんな時だった。
ドカンと、音を立てて、酒場の扉が蹴り倒されたのは。
皆がそちらを見ると、そこには１人の男が居た。
筋肉隆々の、大柄な男だ。丸太の様に太い腕に、目測ではあるが３ｍ半ばはあろうかという長身。剃り上げられ、ツルッとした頭には、ドクロの刺青がある。
そんな男が、ゆっくりと店に入って来ながら、辺りをぐるりと見渡している。
店に居た客達は、何事かと男を見た。

「……」

喋らず、辺りを見回しながら、ゆっくりとカウンターへと歩を進める大男。

高まる緊張感に、1人の客がごくりと生唾を飲んだその音すらもが店内に響く、そんな居心地の悪い静寂だ。

「……」

そしてとうとう男がカウンターに辿り着き、そして――

「……酒をくれ」

――普通に注文した。

そんなあまりにも普通な男の行動に、マスターを含めた全員が思わずずっこけた。

「なんじゃそりゃぁ！！」

全員の心が1つになった、素晴らしいツッコミだ。

ツッコミまれた男は、不思議そうに小首を傾げた。うん、可愛くない。

「なんだと言われても……。ここは酒場だろう？　酒を頼みに来たんだが……」

「いや、それは良いんだがな……。ドアをぶっ壊したのは頂けねぇ。アレじゃあ、物取りと思われても仕方がないぜ？」

心の底から不思議そうにそう問う男に、マスターは苦笑を隠せなかった。

あんなにも荒い入り方をしておきながら、その実ただの客だったときたらこの反応も仕方がないだろう。

「仕方がないだろう。幾ら押してもドアが開かなかったんだ。腹が

立って思いっきり蹴ったらああなったんだ」

喧騒が帰ってきた店内で、男はそう答えた。

そんな男に、マスターは頭を痛そうに押さえながら答えた。

「……あれは引き戸だ」

「……え？」

この後ちゃんと修理費は頂きました。

「そうだ。お前さん、海賊だろ？」

「なななな何言ってんだ！　かかか、海賊ちゃうし！」

「（嘘下手ッ！）……馬鹿しかいねぇのかよ、この店には」

「何だと！？　良いか、オッサン！　馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ！」

「テメェもか……。もういい……」

マスターは頭の刺青や風貌、そういった要素から男を海賊であると判断したが、どうやら正しかったらしい。

目を泳がせながらどもるという、典型的な、最早教本に乗っていそうな慌て方で誤魔化したが、寧ろ「はいそうです」と言っている様なものだ。

冷や汗をダラダラ流しながら決して目を合わせようとしない男に、マスターはため息しか出ない心境だ。

だがそれが男には気にくわなかったらしく、どこかで見て聞いた様な反応を返してきた。若干ドヤ顔なのが腹立たしい。

放っておこう、それがマスターの出した答えだった。

「お、お前も海賊なのか！？」

と、そこへマスターの拳骨で沈んでいた少年が息を吹き返し、男へと話し掛けた。
そんな少年に、男はあぁと返事を返す。

「も、って事はお前も海賊か？」
「おうよ！　聞いて驚くなよ？　俺様は！」
「弱小海賊団の一クルーだよな」
「マスタァァァァ！？」

興味を持ったのか、男が少年にそう尋ねると、少年はふふん、と笑い答えようとしたが、グラスを磨きながら口を挟んだマスターによって撃沈された。

「まぁ良いけどよぉ……。良いか、耳の穴かっぽじってよぉく聞けよ！？　俺は南の海では敵無しとまで言われたあのライム海賊団の」
「あ、マスター。酒おかわり」
「はいよ」
「って聞けよォォォ！」

残念、誰も興味が無かったようだ。
少年の叫び声が煩かったからか、２人は眉を潜めて少年にジト目を送っている。

「うるせぇな、お前は……。そんな１００人が聞いて１人が振り返ればマシな話は聞きたくねぇよ」
「全くだ。そんなデカイ声を出されちゃ、美味い酒も不味くなっちまうぜ……。だからもうお前は黙ってな」
「言い過ぎだろ！？　つかなんで初対面のお前にまで言われてんだよ！」

2人にこっぴどく怒られ、少年は落ち込んだ。若干涙目なくらいに落ち込んだ。
もういい！　と怒った少年は、どうやらふて寝するらしい。カウンターに突伏してしまった。
そんな少年に、2人は声を出して笑った。

「あらら、不貞腐れちまいやがったよ」
「ちぃと苛めすぎな」

もぞもぞと動く少年を横目に、マスターと男はチンとグラスを合わせた。

「おいおい、仕事は良いのか？」
「ふん。あいにく、そんな事を気にするような客はこの店には居ないんでね」

そうかい、そうさ、二人はそう言って笑い合った。
その姿は、まるで旧来からの友の様にも見えた。それこそが酒場の魅力でもあるが。

「そういや、お前の方こそ仕事は良いのか？　お前さん、海賊だろ？　今日1日、街が海賊に襲われたなんて話は聞かなかった。お前が船長なのかクルーなのか、そんな事は知らねぇし、どうだっていい。だが、仕事《略奪》をしなかった事はどうにも解せねぇ。答えてくれるかい？」

酒を煽りながらそう問うマスターに、男は苦笑しながら答えた。

「そんなに睨みなさんな。心配しなくても、俺は……、俺達はこの街じゃあ何もしねぇよ。そりゃ俺も海賊だ。やるときはやるし、街

1つ焼き払ったなんて事もザラだ」

単独での行動が多い賞金稼ぎとは違い、海賊はまず複数人で動く事になる。だからこそ海賊団と呼ばれる訳だが、複数の人間が集まって行動するという事は、その分物資の消費量も、当然人数に比例して多くなる。更に、海賊はその大半を海で過ごす。そうすると、人間が生活するために必要な水や食糧の調達が必然的に難しくなる。

出航前に必要分の必需品を確保したとしよう。しかし、もしも道に迷ったら？　予定していた海路から何らかの原因で離れてしまったとしたら？　確保していた筈の生活品はみるみる内に無くなっていくだろう。

そうなると、彼等には奪うしかなくなる。偶然通り掛かった商船から、偶然立ち寄った街から。

勿論、快楽の為に略奪行為を行う者も居るだろうが、生きるために他者から奪うのだ。

そして、問題はそれだけではない。食糧を手に入れるには、当然金が要る。しかし金品もまた、彼等には入手する方法が限られてくる。

宝島の地図を手に入れた、さぁ探しに行こう。幾多の罠を突破し、幾多の犠牲を払いながら辿り着いた宝箱は、空っぽだった。

海上で他の海賊船を襲ったとしよう。激しい戦闘の末、敵の船長を討ち取った。大きな犠牲を出した激しい戦闘で得た報酬は、敵船長の首に懸けられた賞金と僅かな金品のみ。

危険を犯しても、得られる物は少ないのだ。

故に彼等は街を襲う。戦闘力の無い市民の方が、練磨された海賊を相手にするよりも楽だから。生き証人を残さない為に、片っ端から殺し尽くすのだ。

「そんな俺達だがな……、いや、そんな俺達だからこそ、敵に回しちゃいけない相手ってのは良く知ってる。新世界でブイブイいわし

てる様な大海賊様や、海軍の将校様。そんな中でも、絶対に敵対しちゃならねぇのが、この街の天辺でどっしり構えてんだ。略奪なんて、とてもとても」

そう言って、男は酒のおかわりをマスターに要求した。

「あのお方に喧嘩を売るなんて、俺は死んでも嫌だね」

「……そうかい。それがいい。あんたは頭が良いよ」

ふん、と男はそっぽを向いた。どうやら照れているらしい。良く見れば、うっすらと頬が赤い。やっぱり可愛くない。

「良く居るんだよ。何か勘違いをした「オラァ！　金をだせぇ！」……こんな、死にたがりな」

ふぅ、と肩を竦め、マスターは今しがた押し入ってきた男達を見た。

ニヤニヤと笑いながら銃を振り回し、ドスドスと大股で此方に向かって来ている。

「しみったれた店だなぁ、おい。こんなショボくれた店出して恥ずかしくないのかぁ？　あぁ？」

「ショボくて悪かったな。おあいにく様、繁盛してるんでね」

集団の先頭を歩く男は、ぐるりと店内を見回し、そう悪態をついた。

「あぁ？　随分と余裕じゃねぇか。気に入らねぇなぁ？　おい。……まぁいい。へへ、そんな繁盛してる店も今日で店仕舞いだ。おい！　ありったけの酒と金を出せ！　早くしねぇとぶち殺すぞ！」

「お前さん、やっちまったなぁ……。俺は知らねぇぞ？」

マスターの返答が余程気に入ら無かったのか、こめかみに青筋を浮かべながら、男はマスターに銃口を突き付けた。

それでも余裕を崩さないマスターは、呆れた様に……、それでいて男を憐れんでいるかの様な口調でそう返した。

「テ、テメェ……。余程死にたいらしいな……。なら良い！　死ねぇ！」

「ほぅ……？　面白い事をしているな……？」

男がトリガーを引こうとした、その時だった。

どこまでも冷たく、重い声が店内に響いた。

「どうした？　殺すのでは無かったのか？」

ピタリと固まってしまった男をからかう様な、この状況を楽しんでいるかの様な声だ。

ギギギと、壊れた玩具の様な動きで男が首を声のした方に動かすと、そこには1人の男が居た。

金色の髪を短く揃えた、整った顔立ちをした男だ。

一目で判る程に鍛えぬかれた一切の無駄の無い身体を白いマントで包んでいる。

脚を組みながら男を見据えているその眼光の、なんと鋭い事か。

鷹の様に鋭い目付きは、まるで獲物を見据える猛禽類の様だ。

その口角は、今は愉しげに吊り上っている。

「それが貴様の決定であろう？　ならばそうするといい……。さぁ、どうした。殺したかったんだろう……？　簡単だ、その引金を引けばそれで終わりだ」

自然と、己の身体が己の意思とは関係無く震えてくるのを、男は感じた。

銃口も震え、狙いが定まらない。

「つまらんなぁ……。とてもつまらん。余興にしては最低のものだ」

そう言いながら金髪の男は、銃を構える男に向かって素早く何かを投げつけた。

「なっ！？　か、身体が動かない！？」

己の身体に刺さっている物、それは3本の箸だった。赤、青、白の3色の箸が突き刺さっていた。

「ふふふ、貴様に刺さったその3本の箸の内、2本は死の秘孔を突いている……」

何とか身体を動かそうとする男に、金髪の男はゆっくりと歩きながらそう説明した。

秘孔、それが何なのかはわからないが、死というのは良く知っている。

それだけに、男は更に焦った。何とか近づいてくる金髪の男から逃れようとするが……、動けない。

「俺が何を言いたいのか、もうわかっただろう？　さぁ、選べ……。3本の箸の内の当たりの箸を選べば許してやろうじゃないか……」

簡単だろう？　と笑う金髪の男を前にして、銃を構えた男は先程までの態度が嘘だったかの様に震える事しか出来なかった。
選ばなければ、選ばなければ死ぬ、死にたくない、それしか考えられない。
だがどれが正解かがわからない。運否天賦？　冗談じゃない。自分の命がベットなギャンブルだ。とてもでは無いが、運等と不確かなものに賭けてはいられない。

「さぁ、どうした？　早く選ぶがいい……」

いつしか、店内は誰も一言も発しない、痛いほどの沈黙に包まれていた。動かず、喋らず、行動が許されているのは金髪の男のみ……。

「ふん、やはり貴様はつまらんなぁ……。良かろう、ならば貴様に良いことを教えてやろう」

そう言うと、金髪の男は銃を構えた男の耳元で囁いた。

「時間は、有限だ……」
「えっ？　なっ？　ちょっ」
「俺が5つ数える迄に選ばなかったならば……。貴様は――死ね」
「じょ、冗談だろ！？」
「1つ……」

銃を構えた男は、ひっ、と思わず喉を鳴らした。
どれだ？　赤？　青？　白？

「2つ……」

それは死へのカウントダウン。
ゆっくりと、恐怖を煽るカウントダウン。

「3つ……」

冗談だと笑い飛ばせれば、どれだけ良かったか。身動きの取れない身体が本当なのだと言ってくる。

「4つ……」

赤か？　いや、青かも知れない。いやいや、そう思わせて実は白？
疑心暗鬼に陥った男は、ふと金髪の男が身に付けたマントを見た。
その色は――白。

「し、白だ！　俺は白を選ぶ！」

男は叫んだ。助けてくれと心の中で叫んだ。

「ふふふ……。白、だな？　貴様は白を選んだのだな？」

男はまるで壊れたかの様に首を振った。頼む、と今まで信じても居なかった神に祈りながら。

「ふふふ……。あぁ、残念だ。実に残念だ。これも貴様が選んだ運命……。白は――外れだ」
「えっ……？」

ぐにゃりと、男は自分の視界が揺れるのを感じた。――神は、男の願いを叶えなかったのだ。

「さぁ、終わりだ……」

金髪の男が、ぐっと白の箸を押し込んだ、その瞬間。

「あっ、うっ、ぐっ、あ、あああああぁぁぁぁぁぁ！」

銃を構えた男が、まるで獣の様な悲鳴を上げながら苦しみだした。

ぐにゃぐにゃと、粘土を捏ねているかの様に上半身が蠢き、そして――

「あ、ぁ、うぺぽぉぉ！」

――破裂した。

びちゃびちゃと音を立てて飛び散る肉片を、男の仲間達はただ呆然と見ていた。

ぐらりと、残された下半身がゆっくりと倒れ、びしゃりとどす黒い赤に染められた血溜まりに倒れた瞬間、はっと我に帰った男達は、我先にと逃げ出した。

「掃除……。はぁ……。聖帝様、いや、助かったのですが、出来ればもう少し汚さずにお願いできれば嬉しいのですが……」

「ふん、知らぬな……」

残された下半身、辺りに飛び散った肉片、血で赤く染まった床。

後始末を考えただけで頭が痛くなる状況に、マスターが頭を抱えた。

そんなマスターを横目に見ながら、金髪の男は悠々と出口から出ていった。

「あれが……」

出ていく金髪の男の背を呆然と見ながら、大男は呆けた声を出した。

「そう、あれが……。あの方がこの街の支配者、聖帝サウザー様だ」

この日、１つの海賊団が聖帝の傘下に加わった。

―――

昔、とある男に助けられた奴隷達が居た。
助けられた奴隷達は、男に感謝し、何か礼が出来ぬかと考えた。
すると、奴隷達の内の１人がこう言った。

「そうだ！　街を造ろう！　あの人が帰って来られる、街を、家を！」

それから、奴隷達は互いに助け合いながらとある島に１つの街を造り上げた。
嵐に襲われ、家が飛ばされた事もある、川が氾濫し、家が流された事もある。
だが、それでも奴隷達は礼がしたいという一心で街を造り上げた。
ある日、そんな噂を聞きつけた海賊が街を襲った。

「今日からここは俺達のもんだ！」

そう宣言した、その時、その男はやって来た。……いや、帰ってきた。

男は瞬く間に海賊達を皆殺しにすると、奴隷達に声をかけた。

「ふん。貴様等、このようなちんけな街で俺が喜ぶと思ったのか？　街ではない、貴様等は国を造るのだ！　この帝王が、聖帝が統べるに相応しい国を！」

奴隷達は更に街を大きくした。いつしか、外からやって来る人間が増え、町は街に、そして街は国へと姿を変えていった。

暴れなければ、海賊すらも受け入れる、世捨て人達の楽園。

その国を統べるのは勿論、あの男。

その男の名は――

第一翔：面白い、ならば数えてやろう！（後書き）

南斗鳳凰の今代伝承者、サウザーに拾われたオウガイは、サウザーの、実の祖父の様にして養われた！

オウガイはどんな厳しい世論にも耐えた。サウザーは、そんなオウガイに温もりを植え付けた！

最後の試練を強いられたオウガイ！　オウガイを待ち受けていたのは、あまりにも悲しい結末であった！

こんなに悲しいのなら、苦しいのなら、愛などいらぬ！　老人ホームに送られたオウガイの悲しい叫びが木霊する！

はい、お遊びですね。パチ屋で働いていると、こんなのばっかり浮かんできます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7795z/

鳳凰未だ堕ちず

2012年1月10日02時46分発行